

広野文芸欄

季題 当季自由句

広野町長月句会

山田 基星
梅雨明けのニュースに胸をなでおろす
手花火に二人の孫の声にたり
孫二人浮いてもぐりて水遊び

宮下 純子

命あることをかみしめ終戦日
百合匂う闇をたどりて通夜帰り
月涼し大内宿の萱の屋根

酒井 津祐

ひともとの桔梗は細き瓶にさす
緑陰にしばらくは舞う黒揚羽
木槿垣つたいに返信ポストまで

鯨岡 正子

老いてなほ農一すじや豆の花
ひまわりの花の大きく風にゆれ
雲の峰老嫗よいしよとバスに乗る

阿部 真生

つながれて暑さはき出す犬の舌
五月雨のなま暖かく降りしきる
石垣を登りて苔へ蟻の道

西山子

若さとは愛に傷つく晩夏かな
水着より海紋^{しほ}り出す若さかな
過ぎし日や扇は逆に開き得ず

塩 史子

ひぐらしや年老いし母の細き腕
待つ樂しみ帰る安堵や盆の客
昼餉時疲れを知らぬ蟬時雨

鯨岡 一生

二晩に話つきたる帰省かな
手花火の光はじけて夜も更けり
捕虫綱買ひてはじめに手本見す

根本 山水

海風に夏の始まる松林
土用波テトラポッドを越えて来る
軒下の燕の巢立ち見とゞける

広野みなづき短歌会九月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

金婚の祝いに招かれ老い母の仕立てくれ
たる和服着てゆく
夫と共に走馬燈の如き五十年 余生僅か
と語る淋しさ 猪狩ユリ子

お施餓鬼に詣りて今年も焼香す年々の供
養に心しずめて
年どしの高校野球始まりぬシーソーゲー
ムをたかぶりて見る
玉の汗みなぎる球児の面おもに汗はした
たり白き齒光る 菅原 泰郎

妹よ泣きじゃくりたるその顔が昨日の如
く思ひ出さるる
空襲の警報なるたびリヤカーに家財積み
て逃げたり六十年経ぬ 小澤 健次

カラフルな文具カタログ眺めつつ吾の好
みの注文を出す
すすきの穂そよぎ静かになびきをり月は
見えざる十五夜の晩 田副 耕一

夫病みて手入れ届かぬさ庭辺は木の枝雑
草おもひのままに
息子の刈れる生垣良しと老い夫は両手に
大き丸を描きぬ
覚え居し人の名花の名物の名もおぼろと
なりて老い深みゆく 木村ミヨ子

秋の野を歩めばなでしこ女郎花 やさし
き野草に遠き日想ふ
二千年の眠りより覚めし兵馬俑ミニの土
偶にしぼし見とれつ
それぞれの表情もちたる兵馬俑ロマン追
ひつつ狭庭に増えゆく 新田 里子

待ちに待ちし梅雨明け宣言されたるにテ
レビは次ぎて台風の予報す
日照時間足りぬ稲穂の粒数え夫はぼそり
ととなきを言ふ
母逝きし齡には間あれど病ひ得て身辺整
理をしきりに思ふ 山内 洋子

夕づく日耀^{かがや}ふ野通歩みゆくハイネの詩な
どふと思ひつつ
ひとしきり啼くは何鳥収穫の歌告げんと
や森の小鳥ら
あるとなき夕小波の沼の面静かに和平の
調べかなでよ
平和こそ我等の樂土仰ぐ空胸に小鳥の歌
の降り来る
「見まわり隊」と表示の車過ぎゆけり児
ら見護られてあるを尊ぶ
この郷に生きて晩生恙なき老いの日賜ふ
を幸とし思ふ 山口 歌子



遠藤健太郎